

ヨーロッパのリゾート島

広島修道大学 商学部教授 富川 久美子

香川大学瀬戸内圏研究センター学術講演会 2016年12月19日

ヨーロッパのリゾート島

広島修道大学
富川久美子

「香川に来てお話をして下さい」とのお声がけをいただいた時には、この私がヨーロッパの島の話なぜしなければならないのかよく分からなかったのです。スケジュールをいただきましたら、私だけ瀬戸内海と全然関係のないテーマとなっており、おそらく皆様の息抜きのために呼ばれたのかなと思っておりますので、まあ、観光がテーマですし、気楽に聞いていただければと思います。研究の結論とか、そういうことは外して、お話をさせていただきます。

この3つの島なのですが、右図に示す3か所です。まず、マヨルカ島ですが、スペインにある非常に有名な島なので、たぶんテレビなどで皆さんご存知かと思います。スペインの中の観光地でも州として分けますと、スペインの中の2番目に外国人が多い観光地になっております。あと2か所がドイツの北海とバルト海にある島です。最初にマヨルカ島からお話しします。それから、リューゲン島、ズルト島のお話をさせていただきます。

こんにちは。ヨーロッパのリゾート島についてお話をさせていただきます富川です。よろしくお願ひ申し上げます。今日、お話しさせていただく島なのですが、研究対象としておりますスペインの島とドイツの2つの島です。研究の目的としてはドイツ人を中心に観光客の目線から見た島嶼の発展ということです。

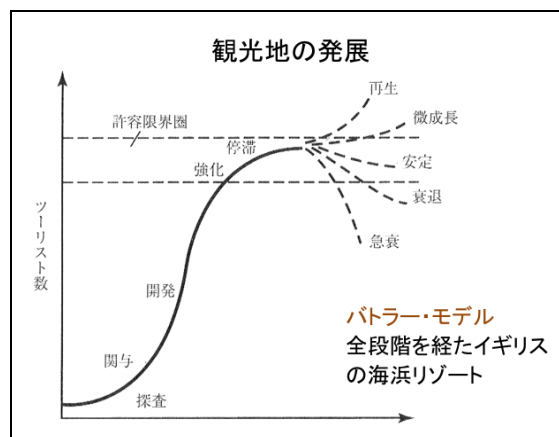
研究対象地

スペイン・マヨルカ(Majorca)島—国際的観光地
ドイツ・リューゲン(Rügen)島—自然と景観
ドイツ・ズルト(Sylt)島—高級リゾート

目的:
ドイツの観光市場における島嶼の発展と観光形態の変遷

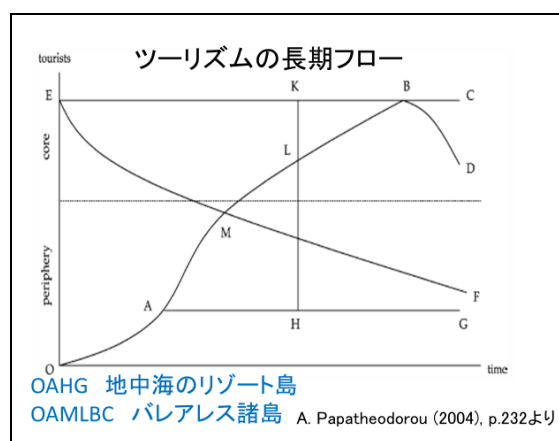


観光地の発展をモデル化した、このバトラーのモデルは、観光学を学んだ方であれば、見たことのない人がいないくらい有名なグラフです。「最初、観光地として少しずつ観光客がやって来る。そして開発が進みますと、一気に観光客がやって来て観光地が発展して行く。ところが、そのうち観光地は停滞期を迎えて、通常は衰退して行く」と言われています。そこに追加投資をするなど、例えばディズニーランドのような新しいアトラクションを入れると再生するとか、そのまま衰退の一途をたどるとか、波を打つような形になるとか、そういった形が観光地の全段階を経たモデルなのです。このバトラー・モデルはもともとイギリスの海浜リゾートをもとにしたものです。



ところが、この地中海の島は OAHG といった形のグラフをたどっている。つまり、衰退期がない状態で、ずっと観光が維持されています。特にバレアレス諸島、マヨルカ島がある諸島なのですが、マヨルカ島を中心とした島は LBC と、このような形で発展をしていて、「いまだに発展が止まっていないのではないか」と言われております。それぐらい人が多い所ということで、今までの研究からしても、「南欧の島に限れば、もしかしたら衰退期がない非常にまれな地域ではないか」と言われています。「いまだにマストゥリズム、大衆観光、大量の人々がまだまだ行っている状況なのではないか」とか、「まなざしの変化、つまり環境にも配慮しないような観光がいまだに横行しているのではないか」と言われています。

Sun & Sand という 2S とか Sea を加えて 3S などいろいろな言い方があります。その一つの S がもともとは Sex と言われていたのですが、最近はその言葉が避けて言われているようです。では、今から各島を詳しく見ていきたいと思います。



南欧の島嶼

「ライフサイクル」が適応できない
衰退期がない

←いまだにマストゥリズム？

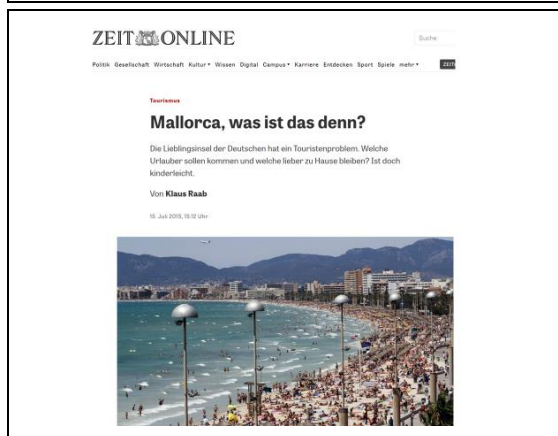
「まなざしの変化」がない

←いまだに2S(Sun & Sand)や3S

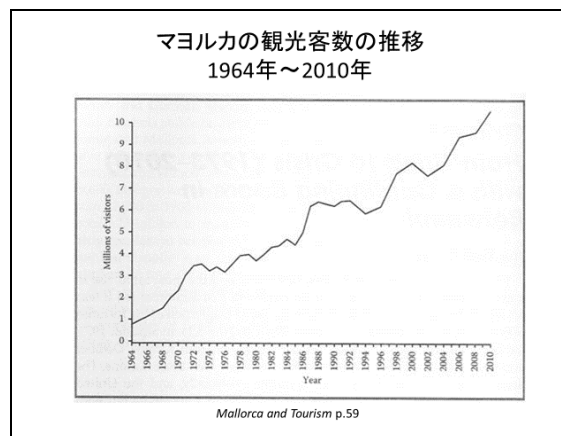
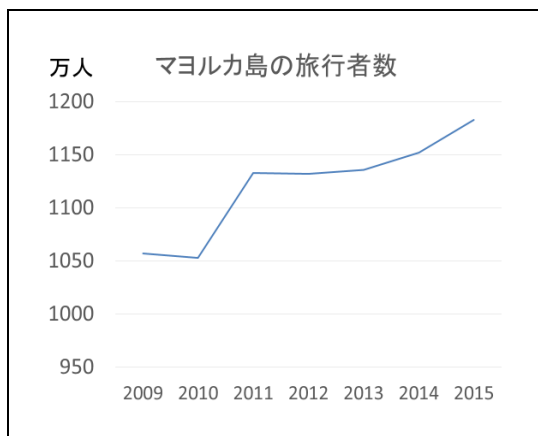
「マヨルカ島がどのような状況になっているのか」ですが、これはマヨルカ島についての新聞記事ですけれども、去年の2015年7月に掲載されたドイツの新聞です。マヨルカは人でいっぱいです。「観光政策を何とかしなくてはいけないのではないかな」と言うような新聞記事です。海岸がこのような状態になっているということですね。それから、もう一つの新聞記事も似たようなもので、「マヨルカは一体どうなっているのだ」と言うことです。建物を見ても景観破壊がひどいですし、ビーチに人がものすごく多いということが分かります。

マヨルカ島は、人口が86万人ぐらいのところに、1,200万人もの観光客がやってきます。86万5千人ほどの人が別荘を持っていると見られます。平均滞在日数が8.5泊ですから、1か月滞在する人もいれば、数日の人もいますけれども、今、時間外労働だとか、過重労働が問題になっている日本とは全く違う世界であると言えます。

確かにグラフを見ますと、このような状況で、観光客数が増え続けています。近年のグラフを見ましても、あまり衰退期が見られないというような状況で、マヨルカ島は発展し、観光客が増えています。



マヨルカ島(3,620km²)
人口約86万人(2015年)
観光客数1,183万人
別荘所有者86.5万人
平均滞在日数8.5泊



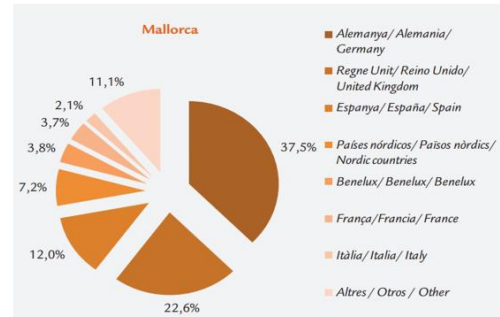
これを見ていただくと、マヨルカ島に外国人観光客が多いということが分かります。ドイツ人がだいたい4割を占めていて、次にイギリス人です。スペイン本土の人達は12%しかいないため、外国人がほとんどを占めている島です。

「マヨルカ島がどのように発展してきたか」と言いますと、最初は貴族の観光地として、自然や異文化を見る、という観光だったのですが、そのうちビーチの方に滞在すると言いますか、「日光浴がアメリカからもたらされた」と言われています。最初は、きちんと洋服を着て水につかっていたのですが、アメリカ人がビキニとか水着を持ち込んできて、それで一気に日光浴が広がったと言われております。徐々に貴族の豪華な観光地から一般の人が行くような観光地になったことで、マスツーリズムが起きました。

このあと、通常の流れとして「環境破壊に反対しましょう」と言う動きが起こり、サステナブルツーリズムとか、田舎の観光、アグロツーリズムとかが推進されるようになってきました。現在でも、マヨルカ島はさきほどの写真のように、ビーチリゾートがメインになっておりまして、夏には5Sと言われている Sea, sand, sun, sangria and sex。今、日本でも流行っていますけれども、sangria はお酒ですね。そういったマスツーリズムが持続している島であるということです。

近年の傾向ですが、基本はやはりパッケージツアーです。日本とちょっと違うパッケージツアーの感覚なのですが、例えば、ドイツのベルリンからマヨルカ島へのパッケージツアーに参加すると、飛行機とホテルまでのアクセスが付いている。また滞在用のホテルの宿泊も付いている。そのため、パッケージツアーの参加者は、1週間などの滞在だけして帰るというような形の観光になっております。

マヨルカ島の居住地別客数の割合 (2015)



マヨルカ島観光発展

19c.: 貴族の観光＝自然や異文化

20c.前半: クルーズ、高級ホテル

→日光浴(アメリカナイズ)、3星ホテル

マスツーリズム

20c.後半: サステナブルツーリズム

アグロツーリズム

現在: ビーチリゾート

(5s=Sea, sand, sun, sangria and sex)

マスツーリズム

近年の特徴

基本はパッケージツアー:

発地から島内のホテルへ、滞在型、5S
多様化

マガルフの例)

1970～80年代: デベロッパによる乱開発

90年代: イメージ悪化、衰退

⇒景観形成、人数制限、質の向上

内陸の例)

貸別荘4万軒→アグロツーリズムへ

ただ、最近はその中でも、少しずつ多様化が進んでいます。例えば、特に景観破壊が進んだ 70 年代から 80 年代、マガルフという場所があるのですけれども、どこかで聞いたことがあると思いますが、ここではデベロッパーによる乱開発が起きました。90 年代になると、イメージが悪化して衰退期を迎えます。「もうこんな汚いごちゃごちゃしたところには泊まりたくない」と、観光客が大幅に減っていったという時期がありました。そこで最近では修景をして、それから人数を制限し、質も向上し、徐々に観光客が戻ってきています。人数の制限というのは宿泊者数、キャパシティの制限です。

それから先ほども言いましたアグロツーリズムです。内陸の例なのですが、農村地に貸別荘がもともと 4 万件ぐらいありました。そこを少しずつホテルのような形にして、1 泊 2 食、3 食付きなど、日本のような食事付きのホテルを増やしています。

マヨルカ島ですけれども、最初、マヨルカに貴族が訪れた頃は文化観光が主でした。船で到着しますと、シンボルの教会が見えます。「ああ、ここがマヨルカ島。着いたぞ」と言うような感動を覚えたと聞いております。あとは、アラブ人が住んでいた時代の狭い路地ですね。路地がたくさん残っていますので、こういったところを歩いたり、その当時の古い家屋を見たりというような観光が始まりました。それと、今、世界遺産観光地になっておりまして、このような場所があります。ショパンが別荘を構えていた所です。こういったところを訪れる観光もございます。それから、パルマデマヨルカという所が街の中心、島の中心地ですね。ホテルがたくさん並んでおります。ここまで乱開発が進んでしまったという景観破壊の典型みたいな形で紹介される場所となっております。

夏に行きますと最初に見ていただいたような新聞記事の状況のビーチが、冬になると閑散とした場所になっています。私は夏に行ったことがなくて、冬にしか行っていませんが、全然ビーチに人がいない状況です。ビーチ沿いの道路にサイクリストがいたり、散歩する人がいたりするだけで、リゾートホテルが延々と続いているような状況です。

それから、先ほども言いましたパッケージツアーなのですけれども、例えばドイツから飛んで来て、ここのホテルに泊まるとなると、ここはドイツ人経営の会社やドイツの旅行会社の資本のホテルが並んでいるのです。そうするとこの地域にドイツ村ができるのです。ですから、ドイツ語のピザ屋さんの看板とか、「この部屋空いていますよ」とドイツ語で書いた貸別荘などがあります。完全にドイツ人相手の街になっていて、メニューもドイツ語だし、ドイツ人が飲むお酒であったりとか、朝食もドイツ風の朝食であったり、そういったドイツ村のような街ができております。

一方、違う所に行ってみますと、今度は英語に変わり、イギリス人村だとすぐに分かります。「イングリッシュ ブレックファースト」と書いてある、このあたり一帯はイギリス人が直接イギリスからパッケージツアーでやって来る所だということが一目で分かります。

面白いことに景観破壊と言われている地域には、さっき言いましたマガルフもそうなのですが、イギリス人が多い街です。ドイツ人はあまりいませんでした。何が景観破壊かというと、ビーチの所に差し迫って、かなり高層の建物が建っていて、静かなビーチで過

ごすというような感じには、もうなっていないということです。歩街の中に入ると、テーマパークのような遊園地ができています。それでも、だいぶ景観が修景されて、きれいになったということではあります。それから、もう一つ違う街ですが、緑を戻した公園を造るとか、建物の高さ制限をするなどして、少しずつ修景に取り組んでいます。

アグロツーリズムなのですがけれども、マヨルカ島の陸の中、内陸の方には農場が広がっていて、アーモンドの木がかなり多い地域ですが、そのアーモンドの花がまるで日本の桜のように咲くきれいな所になっております。裕福な人達はこういった所に別荘を持っていたりするのですが、そういった所を1泊2食付きの滞在を提供するような宿泊施設にだんだん変わってきているというのが内陸部のマヨルカ島の状況です。

では、ここからドイツの2つの島を紹介しますが、その前に、ドイツ人はどのように観光を発展させてきたかということをお話いたします。ビーチリゾートに関して言えば、貴族から始まった夏の保養ということで、ビーチに滞在するようになったのが始まりです。日本と違って、やはり日光浴、それと空気浴、広いところで日光に当たり、肌を空気に触れさせると健康になるというような形で日光浴が流行っていきました。

それから、だいぶ時代を端折っておりますけれども、ソーシャルツーリズムが広がりました。つまり、「お金のない人も、お体の不自由な人も、誰でも彼でも旅行ができるように」という政策ですね。これはナチズムが始めたもので、その当時、休暇が6日から12日間、それで、10日間の無償旅行を与えるというような観光促進が行われました。これが契機となったこともあって、マスツーリズムが50年代に起こりました。そして、あまりにも多くの人が旅行をし、観光批判が起こりました。環境の悪化ですね。環境破壊が進み、観光批判になり、環境にやさしいソフトツーリズム、今は健康増進型のウエルネスツーリズムへと発展していきました。ちょっと高価な観光と言いますか、リッチな観光のウエルネスツーリズムが推進されています。

そう一方で東ドイツではどうだったのかと見ますと、やはりナチズムの時代の流れを汲んでおり、この当時の有給休暇も最低6日間、最高24日間が与えられておりました。また、公共の休暇施設もあり、滞在中は3食込みなのですが、旅行小切手が与えられていて、滞在中に何かしたければ、小切手で楽しむというような形をとっていました。例えば、「旅行

ドイツにおけるビーチリゾートの発展

1793年、貴族らの娯楽、夏の保養
20世紀初：日光浴・空気浴 (Luftbad)
ソーシャルツーリズム
(休暇6～12日間、10日間の無償旅行)
1950年代：マスツーリズムが再興
1970年代：観光批判
1980年代：ソフトツーリズム
2000年代：ウエルネスツーリズム

東ドイツ時代

1946年：
有給休暇 (最低6日間、最高24日間)
公共の休暇施設
滞在中の小切手、3食込み、コンサート・劇場
キャンプ場

1960年代：FKK (裸体主義)

に行くのにカメラなども必要でしょう」と言うことで、カメラも与えられたというような歴史があります。それで、全員が同じ所に行くというわけにもいかないので、とにかくキャンプ場を造れば、皆がいろいろな所に行ける。キャンプ場だったら、特別な施設がなくても、誰でも滞在できるということで、キャンプ場がものすごく発展しました。

それから 60 年代、エフカーカーという裸体主義ですね。主義と言いますか、裸になるという運動が広がって、これが西側の社会にも影響することになります。そこで、リューゲン島を見ていただきたいのですが、リューゲン島はこうに、7 万人くらいの人口の所に宿泊者が 125 万人、平均滞在はそれ程長くなく、5 泊程度です。自然保護区が非常に広く、国立公園があります。先ほど言いましたように海水浴と言っても、やはり日光浴が中心になっております。夏の海水温が 19 度なので、冷たくて水に入れれないという理由もあります。海水浴場には必ずヌーディスト・ビーチという、ドイツ語で言えばエフカーカーのビーチがあります。

このリューゲン島の観光発展を見ていきますと、ドイツの観光発展とほとんど同じです。ただナチズム時代に保養地として利用されたということがあって、それで実はとても有名な島になっております。

政策として観光客が増えたというのもありますし、ドイツ統一後は西側から客が急増しました。東側に行ってみたいという西側の人が増えたということで、今、再開発と修景が進み、自然、サイクリング、ウェルネス、セラピー、クナイプなど、多様な観光の形態を取り入れた所になっております。

宿泊者の推移を見ても、下がっておらず、いまだ発展状況にあるようなグラフになっています。ビンツという所が中心地になっていますが、ほとんどがその中心地に宿泊しているということが分かります。それから、この青い部分が月別の滞在者数です。やはり夏に多く、冬に少ないというのが分かります。しかし、平均滞在日数は季節にかかわらず、あまり変わらない。この島はこれを課題としているわけで、「冬をどうしようか」と言うことに取り組んでいます。

リューゲン島

ドイツ最大の島 (926.4 km²)

人口約7万人

宿泊客数(2011年)

約125万人(平均4.9泊)

島の78%が自然保護区

海水浴場28(FKK10)

夏の海水温19℃



リューゲン島の観光発展

18世紀中: 海水浴客

1816年: 海水浴場が開設

1920年代: ドイツで最も有名な観光地

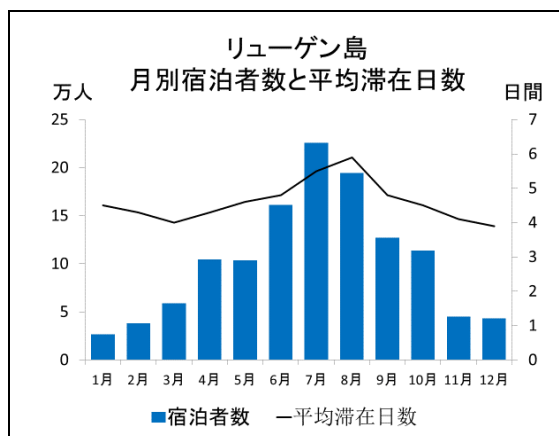
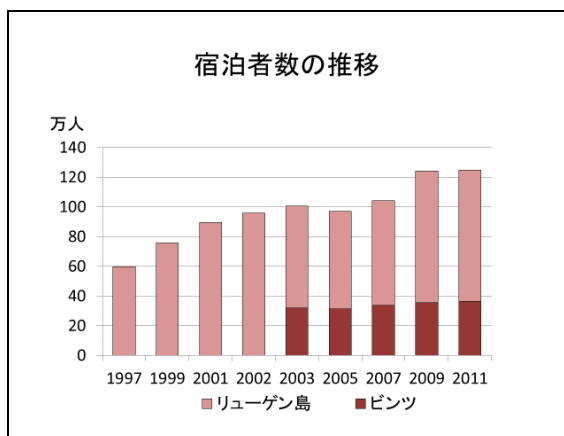
ナチズム時代: 保養地

1945年以降: 観光政策によって客が急増

KdF当時の施設やキャンプ場

ドイツ統一後: 西側からの客が急増

再開発、修景、自然、サイクリング、ウェルネス、セラピー、クナイプなど



そのリューゲン島の紹介です。リューゲン島のゼリンという所なのですが、一つのビーチがある街です。イギリスから輸入した文化ですね。ピアを作って、ここにカフェとかちょっとしたお土産なんかを置いていました。そして、ここに散歩しながら楽しんでいる様子ですね。泳いでいる人はほとんどいません。日光浴の場所です。街には海沿いの散策道がきれいに整備されていました。確か夏だったと思いますが、このように皆さん長袖を着ており、それほど暖かくない所です。

先ほど国立公園があると言いましたが、やはり自然が豊かな島なのです。国立公園の中ではガイド・ツアーも実施されていますし、普通に散策しても良い所です。ここがなぜ有名になったかという、1800年代に書かれた絵画によって、「きれいな石灰岩の景色を見ることができる」と言うことで、ドイツで最も有名な観光地になりました。しかし、今ではその石灰岩の景色はなくなっていました。

先ほど言いましたナチズム時代の宿泊施設が、プローラというビンツの近くにあるのですが、全長が4.5Kmある宿泊施設です。全室シービューで、オール・インクルーシブ、つまり3食付いていて、お茶やお菓子なども全て付いています。センターになる建物が真ん中にあり、そこには大きなホールや食堂があって、皆が集い楽しめるような場所になっていたということです。収容人数が2万人。本当を言うと、これが完成して最盛期を迎えていたら、すごいことになっていたのですが、きちんと完成するまでに至らずに戦後になってしまったという所です。現在は観光資源として、皆が散歩しているという感じですね。あまりにも巨大なので活用のしようがないのだそうです。一部、ユース・ホステルに使ったり、エキスポで使ったりはしているものの、放ったらかし状態になっている状態だそうです。

そんなことがあり、現在では、「旧東ドイツの老朽化した建物を何とかしなければ」と言うことで、「じゃー白い街にしよう」となって、白い街に再生しました。街の中であるとか、ストリートとか、ほとんどの建物を白い色で修景しています。5年前でしたけれども、東ドイツ時代の建物がまだ残っており、少しずつ白く統一していました。

それからですね。この島に限ったことではないのですが、ドイツの場合は観光税という

ものを導入しているので、宿泊する際、チェックインすると税金を徴収され、チケットをもらいます。滞在する日数で金額が決まり、有無を言わず買わされるチケットです。このチケットを持って行けば、周辺の交通機関の利用は全て無料というシステムで、観光税とか、環境税とか、いろいろな言い方があるのですが、これがドイツには全国的にあります。都市部では宿泊税と称して、東京にあるような形で取っているところもあります。また、環境にやさしいということで、自転車を乗せたバスが走っていてもいます。

最後の島ですが、ズェルト島のご紹介をします。この島は錨型の島で非常に変わった形をしております。西側に 38Km の砂浜が延々と続いております。人口 2 万人の島に観光客数が 55 万人で、平均滞在日数が 8.1 なので、1 か月滞在する人もいれば、2、3 日の人もいるというような状況です。ここはエフカーカーのパラダイスということで、ヌーディストのパラダイス・ビーチなのです。このように絵ハガキにヌードの絵が描いてあります。当然、水が冷たいので泳ぐことはできません。それから、本土から直接運転して入ることはできません。汽車に車を乗せて入るという所です。ここはヨーロッパで最も不動産が高い高級リゾート地です。

西側の海岸の砂浜は延々 30 km 以上も続いておりますが、東側は干潟になっており遊べるような所です。海岸の感じが西と東で全く違う島です。このような干潟がドイツの場合は国立公園に指定されております。

ズェルト島の観光の発展はドイツ全体と同じような形ですが、違うのはナチズム時代に軍用施設として使われていたのと、戦後に建設ラッシュが起こったことです。ドイツの東の領土の大部分がロシアの領土になり、引揚者が一気に押し寄せたので、その引揚者のための建築物です。住居の建築が進んだことで、一気に景観が破壊されたと言われております。その一方、高級なリゾート街のカンペンという所は昔風の景観を保ってきています。

この時代はマスツーリズムです。その後、建築物の高さ制限とか、キャパの制限とかをしました。それから旧東ドイツからの客が急増しており、今もますます観光客が増えています。現在も高級リゾートとして、別名「北海の女王」と言われており、夜になると「海のキャバレー」という別名も付いております。

ズェルト島の場合も、このグラフのように宿泊者が増えていて、あまりにも土地が狭いので、ウェスターランドという中心街に宿泊者が集中しています。右のグラフから、最近では冬の滞在が少し増加してきていることが分かります。薄い青から濃い青にかけてのグラフですね。

ズェルト島の観光発展

19c後半: 上流階級の社交場

1920年代: 夏の国際社交場

ナチズム時代: 軍用施設

1950年代~: 建設ラッシュ、景観破壊

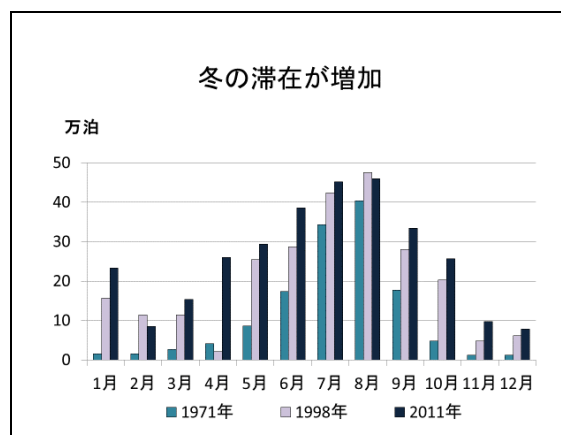
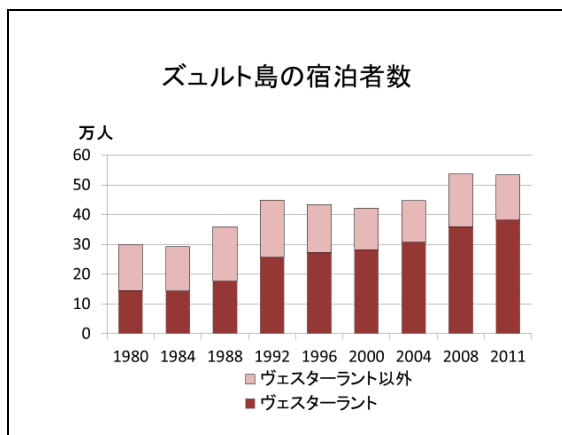
カンペン景観形成 マスツーリズム

1974年: 建築・収容人数規制

1990年代: 旧東ドイツから客急増

現在: 高級リゾート、ウェルネスツーリズム

「北海の女王」、「海のキャバレー」



これが景観破壊の典型とされているウェスターラント。たくさんの建物が建っているのと、海水浴客が、いや海水浴でなくて日光浴ですね。多くの方がここに見えます。現在、街の中は景観破壊と言われながらも、日本人の眼にとっては「どうなのかな」と思うところもあります。それは、日本と違って、看板がない、電柱がない、電線がない、鉄塔がありません。でも、この辺がドイツでは悪評の景観破壊の場所とされています。

高級住宅街、いや住宅地というよりリゾート地ですね。カンペンという街を紹介します。昔からのかやぶき屋根の伝統的な建物があり、これを再現したショッピング・ストリートになっております。ショッピング・ストリートといっても看板が見えないのですが、1軒1軒、よく見ると、ルイビトンであったり、シャネルであったり、ブルガリなどのお店が並んでいます。日本の場合は街の中のデパートにブランド・ショップが入っていますが、ヨーロッパの場合は、このようにリゾート地にブランド品のお店が並んでいるのが常識だそうです。

この周辺も観光客が散策する所です。かやぶき屋根のホテルがあるのですけれども、もし興味がある方がいらっしゃいましたら、ぜひ泊まってみて下さい。とてもでないですけども、私のお給料では無理でした。

お話をまとめさせていただくと、ヨーロッパ島嶼の観光需要がかなり高いことが分かりました。マスツーリズムであるし、景観破壊も進み、その後修景をしたり、観光が多様化したり、島によって差別化をしたりというような対策が推進されています。

まとめ ヨーロッパ島嶼の観光

観光需要の高さ、マスツーリズム、景観破壊

↓

修景、観光税、観光者制限

観光形態の多様化、冬の観光、差別化

これを瀬戸内海の島で考えてみたいと思います。西洋人から見た瀬戸内海の島、シーボルトはドイツ人だったのでしょうか「すごく美しい」と言ってくれました。「美しい島だし生活景がすごく良い」と言われて、日本では西洋の観光客をもっと呼び込もうと、瀬戸内海を国立公園にしました。しかし、現在は環境破壊も進み、それから生活景も一変してしまいました。このような状況をどのように考えるかということですが、「すでにヨーロッパ

も景観が破壊されて、今、それを直しているということが先進事例になるのではないかと考えられます。ただし、ヨーロッパと違うのは、日本の島がマスツーリズムを経験していないということです。自然破壊もそれほど進んでないというように良い方にとらえることができます。ですから、「環境保全に努めることが必要であり、日本人とヨーロッパ人とでは景観への意識にあまりにも違いがあるので、そのへんをどのように理解していくか」、それから「日本はどうしても島を部分的に見やすいので、そうではなく、島全体を視野にした取り組みがあれば良いのではないかと考えます。

以上です。ありがとうございました。

[本城]

富川先生ありがとうございました。富川先生からヨーロッパの3つの有名なリゾート島の成功例といいますか、観光客が落ちていないという話がありました。「今後、我々は瀬戸内海をどのように持っていったら良いのか」と言う話になってくるとは思いますけれども、その部分も含めて、ご質問等がございましたら、よろしくお願いします。

富川先生、私からお聞きしますが、そのようなすばらしいリゾート地がヨーロッパにあるとのことですが、今、これと同じようなものが日本にもありますでしょうか。作ろうとしているような島はありませんか。

[富川]

日本にそのような島がありますでしょうかね。「欧米の目線から見て、このような高級な宿泊施設が必要だ」と言うことが、今、いろいろなところから言われておりまして、例えば、京都などは「もう観光客数はいらぬ。これからは富裕層が良い」と言うことで始めていますし、そのような観光政策になってきているようです。星野リゾートさんがそういうホテルをどんどん広げていらっしゃいます。もしかしたら、竹富島などもそのような例になるかもしれません。

瀬戸内海島嶼観光の可能性

近代西洋人から見た瀬戸内海

- ・ シーボルト(1826):美しい島々、生活景、山岳景
- ・ 1934年:瀬戸内海国立公園

↓

環境破壊、生活景の変化

同:ヨーロッパが先進事例⇒景観形成

異:マスツーリズム、自然破壊⇒環境保全

* 景観への意識、島全体を視野に

[本城]

ありがとうございます。

[質問者]

ドイツなどは海と森の両方があって、自然の恵みである海の恵み、森の恵み、それらを使って、例えば、観光ツーリズムとかといったことが行われていませんか。お話の中では、あまり出てこなかったのですが、日本ではどちらかというと、海の味覚を使って、地産地消で、「そこを元気にしましょうよ」と言うことが各地で行われていますね。ヨーロッパには、そのような発想がないということでしょうか。例えば市場があって、そこを起点、コア、核として、その地域を元気にするとかということが、今のお話では出てこなかったのですが、そういう試みもないということでしょうか。

[富川]

今の話は島の話でしたので、なかったのですけれども、マーケットを作って、そこで行うというようなものはあります。そうですね。例えば、田舎の町で、温泉プールを作ったり、芸術品を置いて散策ができるようにしたり、サイクリングができるようにしたり、ということはもちろんあります。

ですが、やはりヨーロッパは森が一度破壊されていますので、ヨーロッパの人は日本に来て「全くの自然は日本の方が残っている」とおっしゃいます。それが違うのと、それから、海に関して言えば、日本の場合は魚がよく獲れますが、地中海はそういう魚があまり獲れないらしいのですね。ご専門の方がいらっしゃるので、私のはっきりとは言い難いのですけれども、そういうこともあって、海は日本の方が豊かであり、地中海はあまり使えないというか、そのようなイメージがあるようなのですね。で、そういった産業がそれほど発達していないということがあるようです。お答えになっているでしょうか。

[質問者]

北海は活発ですよ。

[富川]

ドイツの北海は干潟になっているので、そういった形では使ってはいないと思います。東側のキールとかは造船などで有名になっており、そのような形かなと思います。

[質問者]

ありがとうございます。

[佐藤様]

私達の島では戦後の農地解放以降、分割が多くて農地を有効活用しようとしても、それが引っかかるのですが、ヨーロッパの方ではどのような感じですか。

[富川]

ヨーロッパの農地ですよ。牧場が中心ですから日本のような田んぼの水の問題とかが全くなく、例えば、バラバラになった民家を真ん中に集めて、それで農地を有効活用しようというような農地整理をどんどん進めてきています。「お宅の農地をこちらの農地と交換しましょう」とか、そういうことがドイツの場合はよくされています。

[佐藤様]

親達がそれをやったのですか。

[富川先生]

いや、国とかその地域が。

[佐藤様]

国がやったら良いのですが、日本は国ができないのです。

[富川]

そうですね。日本には水利関係とか、いろいろあると聞いております。

[佐藤様]

登録台帳はそのまま残して、農地の使用だけを入れ替えるとか。

[富川]

そうですね。ヨーロッパの場合は放牧などをしていますので、共同農場もたくさんございます。

[本城]

先ほどの先生のお話の中で、アグロツーリズム。今、日本でもルーラルツーリズムが盛んになってきておりますけれども、ヨーロッパでは、あまり人が行かないような所に行くような傾向はございませんか。

[富川]

ドイツ人はそういう傾向が非常に強いですね。よく日本人は世界中どこにでもいると言

われますが、いるのは有名観光地。有名でないところにはドイツ人が必ずいるというぐらい、人が行かないところが大好きで、どこにでも行きます。それと、ドイツの場合はあまり過疎化が進んでないのですね。なぜかと言うと、もともと国民性なのでしょうけど、田舎が好きということがあって、田舎にどんどん住宅を建てているということです。

[本城]

今、日本に住んでいる外国人が、例えば、中仙道観光とか何々街道観光に、外国から来たツーリストを案内して行くというようなものがありますよね。ヨーロッパでも、ポルトガルあたりに行けば、そういうものがあるのかもしれませんが、先生の行かれた所で、現在、それが盛んになってきているというようなことはありませんか。

[富川]

何々街道観光というのは、実はドイツが始まりで、ロマンチック街道とか、ビール街道、ガラス街道、そういったものが全国にたくさんあります。それを日本が取り入れて、何々街道にしているということです。もちろん、そういう街道を歩くという観光はございます。

[本城]

ありがとうございます。

[稲田様]

マヨルカ島のハイシーズンとオフシーズンを見たのですけれども、あのような状況が続くと、島は困ってしまうのではないかと思います。我々が島の観光化をめざしても、あのような状況にはなるべくなくしたくないですね。冬になると来てもらいたいし、夏はあまり多く来たら困るというのも、例えば、労働条件、労働者の面からすると、十分なサービスができないと思うのです。たぶん、平準化する方向に進めたいと思っていますと思いますが、これは成功したというようにとらえられているのでしょうか。

[富川]

いえいえ。改善をしなければならいにとらえられています。夏に集中しているのをどのようにして冬に持って行くかということですね。観光客の視点から人もいないシーズンが良いとか、あとは冬の観光、先ほど言いました文化観光であるとか、違った所に行く、訪れるような観光ですね。そういったところにもだんだん目が向いてきて、やはり冬が増えてきています。平準が理想ですから、もっと夏を減らし、冬を増やさないといいません。

[稲田様]

分かりました。ある意味、やはり解決しなければならない問題をいっぱい持っていながらも、ずっと発展している。単純な問題ではないととらえているのでしょうか。

[富川]

ええ、そうですね。ですから、観光客がどんどん増えてはきていますが、農村地に誘導してみるとか、ウエルネスツーリズムという長く滞在しながら、日本では何と言いますか、マッサージが付いていたり、食餌療法が付いていたり、そういった健康増進タイプのツーリズムですね。そのようなものであれば夏に来る必要がないので、どんどん他の季節に観光客を誘致しようとしているということです。

[稲田]

ありがとうございます。

[本城]

もう一つ質問をいただきたいと思います。

[質問者]

本日はありがとうございました。外から大きな会社や国がやってきて、イベントを開催したり、プロジェクトを興したり、お金を投資したりするということは、地域を活性化する上で大きな力になると思います。一方で、例えば、過疎化が進んでしまっているような瀬戸内海の島々で、地域の理解とか、地元の方々がどれだけ関与できるかといったあたりの問題ですが、「どのようにして島を活性化して行くか」を検討する上で重要な視点になるかと思います。今ご紹介していただいたツーリズムを再生していったような島々では、地元の方々がどのように関与したのか、例えば、外から来た人が開発を進めるに際し、地元の方をどのように取り込んで行ったのか、そのあたりをお聞かせいただけたらと思います。

[富川]

ありがとうございます。たぶん地元の方の意識は日本より強いと思いますし、ドイツ人ですから、意見を言わないはずはありません。どんどん意見を言って、大企業の進出を阻むとか、そういう事例はやはりたくさんあります。

高さ制限もありますし、規模制限もありますし、かなり厳しくしていますので、日本のようにいきなり外からやって来て、大規模にデベロッパーが開発するというようなものは、今、だいぶ抑えられております。ただ、マヨルカ島がこのように進んでしまったのも、やはりスペインだからなのですね。当時のスペインには観光を推進しようというという政策があって、急激にドイツ資本のホテルが建ってしまったり、イギリス資本のホテルが建ってしまったりということがありました。自分達のドイツ本土では、こんな乱開発をしない

のに、マヨルカでやっているというような、そういう批判が多く出ております。ですから、住民が阻止するという組織はとても大きな力があります。

[本城]

いろいろ質問していただきまして、ありがとうございました。